

令和2年度第1回北海道立帯広美術館協議会議事録

- 1 日 時 令和2年10月2日(金) 13時30分から16時10分まで
- 2 会 場 北海道立帯広美術館 講堂
- 3 出席委員 吉田 真弓(会長)、加賀 学、能戸 貴英、原田 純子、宮澤 道、大河原 茂美、土井 裕子、橋本 雄大、柳田 祐子、佐川 芳子、牛木 ゆかり(計11名)
(※ 欠席 持田 誠)
- 4 事務局 館長 野崎 弘幸、副館長 遠藤 新理、学芸課長 福地 大輔、総務課主査 早坂 隆広、総務課主任 西邑 有哉、主任学芸員 菌部 容子、学芸員 耳塚 里沙
- 5 傍聴者 なし
- 6 議 事

議事に入る前に、館長挨拶、委員及び美術館職員紹介、展覧会鑑賞を行った後、会長の議事進行により議事に入る。

- (1) 副会長の選任について
- (2) 令和元年度事業の実施状況について
- (3) 令和2年度事業の運営状況について
- (4) 協議・意見交換

7 会議記録(議長: 吉田会長)

- (1) 副会長の選任について
事務局案を提示し、加賀委員が副会長に選任
- (2) 令和元年度事業の実施状況について
事務局より説明、質疑・応答なし
- (3) 令和2年度事業の運営状況について
事務局より説明、質疑・応答なし
- (4) 協議・意見交換

委員: コロナの関係でいろんな活動ができない状況で、美術館においても展覧会が開催できないのはすごくさみしく感じた。今回、協議会に出席するにあたって道教委のホームページを拝見したが、物足りなさを感じた。一方 Facebook は、学芸員が作品を紹介する動画があり、こういったものがあると興味が湧くと思う。「行ってみよう」と思えるような情報発信の仕方を工夫すれば、遠方から足を運んでいただけたらと思う。

昨年のチームラボも根室の子ども達に見せたいと思えるような展覧会だったため、今までの美術館の概念を超えるような展覧会であれば、今まで来たことがない人も呼び込めるのではないかと思う。

事務局: 令和2年度に道立美術館のホームページのリニューアルを予定しており、それに合わせてコンテンツの充実を図っていきたいと思っている。

委員：昨年タグチアート展で行われた「ぶっちゃけギャラリー・トーク」は収集家のオーナーが世界を渡り歩いて美術作品を「買う」というお話を聞いて、ものすごく面白かった。美術作品の見方が変わったきっかけとなった。

この蜷川実花展は若い女性が大変多く、この年代の方を取り込むことによって家族や子どもが今後成長したときに、美術館に行くことが日常的な楽しいことになっていく。昨年のチームラボでも家族や若者、そして子ども向けに先行投資をすることにより、来館者が増えていくことは素敵なことだと思った。今回、若い女性向けにどのようなアナウンスや仕掛けをしたのでしょうか。

事務局：Facebook や勝毎のインスタグラムなど SNS の発信がある。昨年のチームラボをきっかけに、子どもが大人になったときにも足を運んでもらえるような老若男女問わず誰もが楽しめる展覧会を今後も企画していきたいと思っている。今回、特別に若い女性向けにということではなく、性別年代分け隔て無く発信している。

委員：蜷川実花展は若い女性に人気があるものの、東京や札幌までは行けないが帯広だと手軽に行ける。全国巡回する展覧会であれば、CM も全国展開できるため、目に触れる機会が多く、宣伝は効果的だと思う。帯広美術館の情報は、地元の方に聞いても FM ラジオ自体、なかなか聴いておらず、主婦の立場からも新聞の掲載は目に入ってこない。

事務局：釧路新聞には月 1 回掲載しているが、釧路市立美術館や釧路芸術館の情報も掲載されるため、地域のミュージアム全体についてご関心をお持ちいただければ幸いである。

委員：来年度、帯広美術館への研修旅行を計画している。鑑賞のほか、ギャラリーツアーやオリエンテーションを受けたいと思っているが可能でしょうか。

事務局：事前に日程調整等させていただき、要望に応えたいと思います。

委員：経済の側から文化芸術活動を見させていただくと、地域の芸術文化の度合いが高まれば高まるほど、地域社会に元気が出ていることを感じる。今回の蜷川展は釧路や根室など遠方の方をはじめ、若い方が沢山来ており、経済の面からも文化は非常に大切なものと感じている。昨年の「なつぞら」効果によって地域経済がプラスに働いた。帯広は美術館のほかに市民活動の一端として、帯広市民劇場で市民がオペラを作り込むような活動などがあり、地域の文化・芸術活動が盛り上がりとても感謝している。経済界からは側面からの形になるが、出来る限りの支援をしていきたいと思っている。

また、教育の面から子どもが大人になって、地域社会・地域経済を担っていくことを考えると、子ども達に与える文化・芸術の効果は非常に大きいと感じる。昨年のチームラボのように小さい子どもでも興味を持ったり、中学生・高校生・大学生も気軽に足を運んでもらえるような美術館づくりをしていただければと思う。

委員：蜷川実花展を拝見して、今回、作品ごとにキャプションがついていなかったのは何故でしょうか。

事務局：作者の意向によるものです。

委員：文字情報でなく感性で受け止めることを求められているようでとても面白く感じた。

次に、美術館評価についてですが、こんなに詳しく、そして、「C」評価もあるなど厳しく実施されていることに感心した。アンケートも評価の対象としているようですが、どのように行っていますか。

事務局：通年でやっているものは、出身地、性別、年齢から始まり、特別展やコレクション・ギャラリーの評価、ショップやティーラウンジの評価を計っている。また、特別展の関連事業に併せて行うギャラリー・トークやキッズ・ミュージアムなど個別にアンケートを実施し、評価を計っている。

委員：具体的な意見はPDCAサイクルに基づき、今後、反映していただければと思う。
次に、コロナが落ち着いてきたようですが、来館者は戻ってきましたか。

事務局：今年度初めの展覧会は臨時休館を経て、約1ヶ月間の展示であり、次の中島潔展は通常どおり開館したものの、過去の同規模程度の展覧会と比較すると、6～7割減という試算になった。一概には言えないが、コロナの影響もあって足を運んでいただけなかったという印象である。

一方、蜷川実花展は初日が4連休と重なったことや札幌芸術の森での開催が会期延長したことがCMに流れたこともあり、それが帯広で開催されるということも関心が広まったように感じており、来館者数が増えているのではと推測する。

委員：今日は本当に入っているという印象。芸術鑑賞は不要不急だと言われているが、やはり心にゆとりを持てるので、応援しています。

事務局：コロナの関係で修学旅行が道内に変更になったため、訪問先が帯広美術館になったという話も聞こえてくるので、今後、来館者が増えていくような状況も見受けられる。

委員：コロナの時代なので元気が出るような展覧会があるといいなと思っている。帯広美術館来館者200万人の方が、子どもが楽しめる企画を期待していると言っていたことを踏まえ、以前にも要望が出ていた絵本展やアニメの原画展など、大人も子どもも楽しめるような企画がいいのではと感じた。また、中学校や高校の美術の教科書に載っているような一流の絵画を展示する展覧会があってもいいと思う。開館当初の「西洋の美術」は大変賑わったという話を聞くので、普段観られないような作品に触れる機会があると良いと思う。また、地域の方に「美術史講座」のような勉強できる機会があると良い。

事務局：北海道の財政事情は厳しい面もあるが、地域のサポートにより様々な展覧会を開催しており、今後も引き続き、連携を図りながら魅力ある展覧会を開催していきたいと思っている。また、特別展に合わせて特別展セミナーを実施しており、内容によって道民カレッジの連携講座として実施している場合もあるので、今後、どのように展開していけば良いか検討していきたい。

委員：昨年の協議会において高校生・大学生の来館者が少ないというお話を伺った。大学生の子どもに招待券を渡し、周りに声をかけると「行きたい」という声上がるので、お金の問題もあるのかとも思う。

昨年のチームラボは、私よりも年配の方にはお勧めできなかったが、家族連れや幼稚園・保育園の子ども達の様子、おじいちゃんおばあちゃんが連れて歩くお孫さんなど見る

とすごく楽しんでいたので、美術館だけでもレジャーランド的な良さがあっても良いのだなと感じた。

また、ホームページが北海道庁の中に組み込まれているのであれば、帯広美術館独自で発信できると良いと思った。

事務局：ホームページ自体は各館単独で存在している。令和2年度に魅力的で効果のあるデザインや構成などの設計を統一した仕様に基づいたホームページを各館で作成し、情報発信できるようにリニューアルを予定している。

議長：ホームページは大変難しいのですが、とても個性的なものを作っていただくと、それだけですごく楽しめるので、是非、お願いします

委員：子ども達が成長過程の中で芸術に触れることは大事だと考える。コロナ禍で授業時数が減っている中で子ども達もやるのが沢山ある。池田町から帯広美術館までは1時間ほどかかるため、授業時数を考えると半日かかるため厳しい面がある。美術館側からの仕掛けがあると、1校でも多く美術館を訪れて本物の芸術に触れる機会になると思う。

事務局：道教委の事業として美術館が学校に出向く出張アート教室があるので、そちらを活用することもできます。

委員：当該年度では既に教育課程が始まっており、翌年度の募集でないと、なかなか厳しい。

事務局：残念ながら当該年度しか対応できない状況であるため、今後、検討したいと思います。

委員：昨年度の実施状況ではインターンシップを除くと学校教育との連携が少ないと感じた。昨年は作品に照明を当てるとても興味深い連携授業を実施させていただいた。当校は歩いて行ける所に位置しているため、2時間の授業で完結できる。以前に比べて美術の時間が減っているため、半日かけて4時間分の美術を実施することは、非常に厳しいと思う。市内の学校においても、バスの使用が限られているため、校外学習で使用してしまうと使えなくなってしまうので、現実問題として、歩いたり自転車でいけるような学校しか来られないというのが現状。

学校教育との連携を増やしていくためには、出前授業の回数を増やしていただいたり、様々なプログラムを作っていただくと良いのではと思う。また、夏休み中の課題として鑑賞させることも、1つの方法と考えられるので、美術教師の理解と学校のバックアップについて、校長会の中でも色々な話ができる。学校教育との連携は重要と考えているので、資料のページを跨ぐくらいになるよう、今後とも連携していきたいと思っている。個人的な意見であるが、帯広には素敵な作家さんが数多くいる。開館当初、印象派の絵画が沢山展示されていてすごく衝撃的であった。実際に観るのと写真で見るとでは全く違う。子ども達にも地域の作家さんがこんな絵を描くんだ、こんな細やかな写実的な絵があるんだということを味わってもらいたいと思っている。

事務局：美術作品なしで出前授業に行くケースもあるので、出来る限り要望に応えられるよう事前に相談いただき、今後も学校教育との連携を図っていきたいと考える。

委員：しらかばの会は開館から美術館と共に活動してきたが、今回、コロナの関係で全道の美術館のボランティアと協議して、美術館が開館している間の5月26日から6月24日

まで、活動を休止させていただき、美術館には大変迷惑をかけたと思っている。
しらかばの会では、子どものうちから美術館に足を運んでもらえるように平成14年度から小中学生の無料招待事業を開始しているが、高校生の来館者が少ないということが、昨年の協議会でも話題にあがっていた。そのため、しらかばの会としても無料招待事業を高校生まで広げられるか検討を続け、今年度の総会において、高校生の無料招待事業を実施することを決定しました。今回の蜷川実花展は高校生以下無料であるため、しらかばの会としては、有料であるコレクション・ギャラリーを無料招待として協力している。高校生の無料招待を委員のみなさんからもPRしていただけるとありがたい。先ほど別の委員からも意見が出ていたが、大人も子どもも楽しめる絵本展を来年度とは言いませんが、何年か計画で検討していただきたいと思っています。

事務局：欠席した持田委員の意見について、事務局から回答を申し上げます。

・帯広美術館の活性化について

帯広美術館をはじめ道立美術館では、令和2年度、ホームページのリニューアルを予定しており、それに合わせてコンテンツの充実も図ることを予定しております。また、地域の文化・芸術施設など様々な社会教育施設との連携については、AGH事業を通して今後も引き続き連携すると共に、図書館との連携については、平成30年度のアールブリュット展の関連事業として、道立図書館と連携し絵本コーナーを設置しましたので、今後も機会があれば検討していきたいと思っております。

・道東地域の文化振興の発展について

今後も引き続き、アートギャラリー北海道事業をはじめ、様々なネットワークを生かし、道東地域の文化振興の発展に努めていきます。また、アイヌ文化に関わっては、北海道に「民族共生象徴空間ウポポイ」が今年度開館されたこともあり、今後、検討していきたいと思っております。

・美術館の役割に期待すること

帯広美術館では展覧会の規模に関係なく、来館者の安全確保のため、コロナ感染対策を講じながら、展示形態や普及事業の実施方法について検討を重ね対応して参りました。今後においても、新しいライフスタイルが定着していく中で、来館者の安全確保を図りながら、気軽に足を運んでくれるような魅力ある展覧会を企画していきたいと考えております。

また、所蔵作品のデータベース化については、部分公開に向けて全道立美術館で令和3年度に作業を予定しております。また、学芸員の調査研究活動については、今後も引き続き、紀要の論文執筆や展覧会の形で成果を発表していきたいと思っております。

・今後の取組（要望）

今後も引き続き、地域や教育機関と連携し、美術館の役割を果たせる活動を継続していきたいと思っております。

議長：その他、意見等はありませんか。無ければこれで議事を終了させていただきます。

（議事終了）